新潟市教育相談センター
新潟市特別支援教育
サポートセンターだより

もえぎ

第　122　号
令和７年１月10日
新潟市教育相談センター
新潟市特別支援教育サポートセンター
新潟市中央区西大畑町458番地1

依存先に選ばれること

藤　塚　静　治

昨年の10月末、「令和５年度　児童生徒の問題行動･不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」が文部科学省より公表されました。全国小・中学校の不登校児童生徒数は34万人を超えて過去最多、学校内外にて専門的相談・指導等を受けていない児童生徒数も13万人超とありました。

後日、公表を受けた新聞朝刊コラム*1の内容に考えさせられました。以下、一部抜粋します。

> そもそも、学校とは何なのか。みんなが同じ方向を向いて座り、何かと規則でダメと叱られる。勉強といっても、決められた答えばかりを求められてはつまらない。楽しい思い出もあるけれど、もう一度行きたいかと問われれば、迷ってしまう。

教室の様子には賛否があるかもしれません。校則は見直しが図られているところも増えました。しかし、「もう一度行きたいかと問われれば、迷ってしまう」の部分には、正直、私も迷いました。

そのとき、大学の先生の講義*2にあった言葉を思い出しました。「自立とは『依存先を増やすこと』」その際､熊谷晋一郎の障害者運動を紹介されました。熊谷の著作*3には、著者自身、トイレ、入浴、着がえ、仕事など、生活のあらゆる場面において、24時間介助者の支援を受け続けることなしに立ち行かないこと、障害者運動が出した答えの一つは、「不特定多数に依存先を分散する」という戦略だったことが述べられていました。このことから、自立には依存先を増やすことが大事と分かります。

不登校支援に当てはめて考えると、子どもが必要とする依存先（支援者・支援機関）を幅広く増やすことで、学校復帰を含めた社会的自立を支援することとなります。依存先は、子どもが依存したくなる存在でなければなりません。しかし、子どもは依存先を自ら見付けることができるのでしょうか。やはり、子どもとの「関係づくり」を大切にしながら関わろうと努める「伴走者」の存在が必要です。伴走者には学校、SSR、フリースクール、保護者、そして当センターなど､誰もがなれます｡伴走者が現れた時､子どもは安心して伴走者や伴走者がいる機関を依存先として選ぶかもしれません。選ぶことは同時に、自立への一歩を踏み出したことにもなるでしょう。

学校が依存先に選ばれたとしたならば、子どもに限らず誰もが、問われて迷ったとしても「もう一度行ってもいいかな」と思えるかもしれません。

*1 朝日新聞 2024.11.5　１面コラム
*2 所員研修 2024.7.3　講師・新潟大学田中恒彦准教授
*3「私にとっての憲法」岩波書店 2017 熊谷晋一郎他 p92

令和６年度「作品展」の紹介

日時：令和７年１月24日（金）
　　受付・開場　12：30～13：00
　　音楽発表　　13：00～13：20
　　物品販売　　13：20～14：10

会場：新潟市教育相談センター

この作品展は、教育相談センターに関わる児童生徒の活動や成長の様子を保護者や学校、外部の方に見ていただき、理解を深めてもらうことを目的に開催しています。音楽発表では万代太鼓や楽器演奏（録画）を予定しています。物品販売では、「ぐみの木教室」の通室生が店員として接客します。各区教育相談室や「アトリエ」に通室している児童生徒が制作した作品も展示します。多くの方にご覧いただくことにより、子どもたちが達成感や有用感を感じることができればよいと思います。

なお、作品展当日の駐車場が大変混雑します。気を付けてお越しください。

令和６年度　教育相談研究会

〈研究主題〉「今、求められている子どもへの支援」

不登校の課題と支援の在り方　～居場所づくりから関係づくりへ～

日 時　令和６年11月20日（水）14:00～16:30

今年度は、「不登校の課題と支援の在り方～居場所づくりから関係づくりへ～」をテーマに教育相談研究会を開催しました。

〈教育相談センターの発表〉

教育相談センターの発表では、文部科学省や教育相談センターの不登校分析から見えてきた課題と教育相談センターで行っている不登校支援の実際（教育相談部、子ども支援部）について発表を行いました。

はじめに、文部科学省から示された全国的な不登校に関する調査結果や教育相談センターで受理した相談ケースの分析から、ここ数年の不登校の変化や課題として、①人との関わりに不安を感じている子が多い、②低中学年の不登校が増加している、ことを伝えました。

その上で、教育相談センターでは、近年の不登校課題に即して「伴走型支援」と「組織的な支援体制」を大切にした不登校支援を進めていることについて述べました。

まず、教育相談部では、『心理的安全』をベースとして、教育相談の他に、個別学習室、アトリエ、遊ぶデーという子どもたちの活動の場を提供していることを紹介しました。そして、それぞれの活動においては、「人との関わり」「プラスのフィードバック」「自己決定」の３つの視点を意識しながら支援を進め、参加している子どもたちが小さな楽しみや充実を積み重ねていくことを大切にしながら、学校復帰を含めた社会的自立を目指していることを伝えました。

次に、子ども支援部では、昨年度ぐみの木教室に通室した子どもへの支援について発表しました。教育相談部が大切にしている３つの視点に「スモールステップ」と「個に応じた支援」を加えることで、子どもたちが様々な経験を通して少しずつ自信を取り戻しています。今回、事例として発表した子どもは、集団の中での不安が強く、自己肯定感が低い状態でした。しかし、ぐみの木教室で少しずつ経験を積み重ねることで、できることが増えていき、最終的には学校の教室やスペシャルサポートルーム（SSR）で活動できるようになったことを、ポイントを整理しながら紹介しました。

新潟市内の小学校においても、SSRが設置され始め、児童生徒の教室以外の居場所が広がりつつあります。SSRという居場所の中で、どのような関わりが大切なのか、どのような支援が児童生徒の社会的自立へとつながっていくのか、センターの発表がその一助となれば幸いです。

〈講 演〉

“関係づくり”を意識した学校での関わりと精神的不調

新潟大学人文学部
心理・人間学プログラム
助教　横山仁史（よこやまさとし）
博士（医学）
臨床心理士／公認心理師

世界の児童生徒の約11％が学校欠席であり、不登校・欠席を防止するために「仲間・親子の関係づくり」が有効であろうということが世界中で共通する見解である。孤独感とは、「望ましい社会的つながり」と「実際の社会的つながり」の間に不均衡があると認識された際に発生するものである。単に他者と過ごす時間を増やすのではなく、本人が望ましいと感じるつながりを目指し、今現在のつながりとのギャップを埋める働きかけが“関係づくり”である。本人を置き去りにせず、関係づくりの意思決定に参加させること、本人の「望ましい社会的つながり」が安心して発信でき、本人とともに協働的に取り組むことが重要である。

◇関係づくりを意識した被援助者（児童・生徒・保護者等）とのコミュニケーション

援助者が陥りやすい「６つの罠」は、“関係づくり”を妨害する可能性のあるコミュニケーションパターンである。（⇒罠から抜け出す方法）

①**アセスメントの罠**：情報収集に集中してしまい、相談者に閉じた質問ばかりすることで、相談者の疎外感や受け身な態度を促進し、会話を中断させてしまう。
⇒自分が聞きたい内容だけではなく、相手が話したい内容に配慮し、相手の話を聴く。

②**専門家の罠**：援助者が被援助者の話を聴かずに、専門家として問題の解決を図ろうとする。
⇒援助者は「無知の知」で対応し、誘導する中で本人が発見するように、自己変革を目標にした問いかけをする。

③**早すぎるフォーカスの罠**：援助者が問題解決を急ぐあまり、被援助者の話を聴かず会話を展開させてしまう。
⇒今、ここで起きている事象に目を向け、本人の話す言葉からチェンジトーク（変わりたいという言葉）を探して焦点を当てる。対になる維持トーク（変わりたくないという思い）を拾い、共感を寄せて一緒に悩み、考える。

④**レッテル貼りの罠**：援助者が被援助者に関する背景情報だけで決めつけた関わりをしてしまう。
⇒問題をあらゆる側面から見つめ、全体との関わりの中で個人の存在を踏まえて、正しく把握する。

⑤**悪者探しの罠**：援助者からの批判を恐れて、被援助者が問題の原因が自分にあると考え、援助者からの質問を避けようとする態度を、援助者自身が作り出してしまう。
⇒「あなたが何に困っていて、どのように援助できるか」を相談したい旨を伝える。

⑥**おしゃべりの罠**：話し合う話題から外れて会話を進めてしまう。
⇒被援助者の利益になるか等、相談のテーマに沿った情報収集と仮説検証を展開する。エピソードよりも意味を伝える。

円滑なコミュニケーションのためには、何事も生じていない時の働き掛けも重要。保護者との関係も平素から築くと円滑になる。

◇児童思春期をとりまく精神医学的問題

日本の児童精神科医の認定医数は2023年４月１日現在でわずか501人と不足しており、教育現場におけるメンタルヘルス対策の普及が必要である。抑うつ症状は大人だけに限らず、小・中・高校生においても一定数見られる。しかし、子どもの場合、抑うつ気分の多くはイライラやかんしゃくで表現され、反抗期として見逃されやすい。一方で、心の不調と思われるケースには月経前症候群など、精神疾患とは別の治療が必要な場合もある。さらに、身体症状や気分の落ち込みなどの精神症状が重度、長期化し、保健室での休養や欠席数の増加による学習の遅れや疎外感などの二次障害、不登校などの三次障害につながることもある。子どもの身体症状や行動から、子どもの心身の不調を捉え、適切に受診を勧めるなどの支援ができるよう、援助者はメンタルヘルス・リテラシーを高める必要がある。

〈情報交換で出てきた話題〉

研修の最後に、様々な立場の方でグループを作り、実際の不登校支援や今後取り組みたいことについての情報交換を行いました。情報交換では以下のような話題が出ました。

- 遊びを中心に関わりを広げ支援を進めていくことが大切だと感じた。
- 地域の人材を活用し、支援体制を整えていきたい。また、本人の気持ちを受け入れてくれる人の存在をつくっていく必要があると思った。
- SSRで活動する内容は子どもが決定する。自己決定の場を設定することが重要だと感じた。
- 本人が参加したケース会議の実施と合意形成を図る場の設定が大切だと思った。

- 子どもたちだけではなく、保護者へのサポートを丁寧に行うことで状況が改善する可能性が高まることが分かった。

〈研究会参加者の方々の感想〉

- センターでの相談分析や具体事例をお聞かせいただき大変勉強になりました。教育相談部の安心と自信の再構築のための個別、協働の支援と子ども支援部の社会的自立を目指した学校を含む関係機関との連携を軸にした積み上げ支援について学ばせていただきました。
- 横山先生のご講演では、センターの発表と繋げながら学術的根拠や医学的な知見の話がありました。また情報交換によるアウトプットの機会も設定されており、短時間ながら最大限の学びを得たと感じました。
- 学校で関わる生徒だけでなく、地域の子どもたちにも目を向けて、日常的に彼らを広く理解して、私たち大人が立場や役割に応じて、継続的に関わって行くことが大事だと感じました。
- 横山先生のお話が大変勉強になりました。自分自身の児童生徒への対応を振り返り、改善する機会となりました。我々大人はもちろん、子どもたち自身もメンタルヘルス・リテラシーを身に付けるような活動を組み入れていく必要性を強く感じました。
- 医学的な観点からの不登校の捉えは参考になりました。生徒や保護者への声の掛け方、相談のポイント、陥りやすい失敗例なども、今後の取組に生かせるものだと感じました。また、情報交換においては、他校種・他機関の方々との意見交換ができ、視野を広げることができました。

〈夜間「学習・進路相談室」・訪問教育相談・各区教育相談室の活動紹介〉

研究会が始まるまでの時間、それぞれの取組や活動の様子について映像で紹介しました。感想を紹介します。

- 動画から、相談センターなどの活動の様子が伝わってきました。
- 普段なかなか分からない、教育相談センターの取組を知るよい機会となりました。
- 最初に流れていた各区教育相談室の写真・スライドも、子どもの笑顔があふれ、明日からこんな笑顔を目指したいと思いました。

支援部の活動紹介

子ども支援部主任　長澤　靖子

先日、パズルに取り組んでいた通室生がいました。最後の１ピースをはめると完成です。すると、「待って！待って！」と言いながら、通室生全員が集まりました。全員が見守る中、最後のピースがはまると、歓声と拍手が自然に起こりました。「ぐみの木教室」の日常の１コマです。

教育相談センターにある「ぐみの木教室」では、学習や自分で挑戦することを決めて取り組む「チャレンジタイム」と、他者と関わる力を育てる「コミュニケーションタイム」があります。また、週に１回開室している東区分室と西区分室があります。今年度から分室の通室生との交流を増やすため、分室の通室日以外でも参加可能な活動を紹介し、参加できる人は「ぐみの木教室」に来て、交流しています。様々な野外活動や体験活動があり、参加した通室生たちは、楽しい思い出を共有しています。

通室生は、通室しながら心のエネルギーをため、成長していきます。成長の度合いは人それぞれ。人と比べる必要はありません。その人なりのペースでよいのです。子どもたちが様々な活動を通して、自分を理解し、他者と関わる喜びや楽しさを味わう。「ぐみの木教室」はそんな支援を行っています。

「アトリエ」で自己表現

「アトリエ」講師　草間　裕子

色鉛筆、クレパス、水彩、油彩、折り紙、粘土…。「アトリエ」には様々な画材があり、その日の気分で画材を選び、作品を制作しています。いろいろな画材を使う子もいれば、同じ画材で黙々と制作する子もいます。

絵を描くことは楽しいだけでなく、悩むことも多いです。それは、小さな子どもから画家と呼ばれる人まで皆共通しています。誰もが色や形をどうするか真剣に悩み、時にうまくいったと喜び、時にがっかりしながら制作します。そして出来上がった作品は、誰にとってももう一人の自分、つまり自分の分身のようなものだと思います。この分身はなかなか思ったようにはならず、素直な自分を表現しようと思ったのに平凡で面白味のないようなものになってしまったり、かっこよくしようと思ったのに派手なだけで薄っぺらな作品になってしまったり、いろいろです。うまくいって喜ぶより、その時々の自分を持て余して落胆することの方が多いように思います。ただ、このように絵を描くということは今の自分自身を見つめる行為ともいえると思います。

今日も「アトリエ」には、今の自分と向き合う子どもたちが自分に合った表現に悩みながら、でも、何か表現しようと手を動かしています。

夜間「学習・進路相談室」から

夜間「学習・進路相談室」主任　坂井　　毅

夜間「学習・進路相談室」では、学習や進路に不安がある中学生に対して、学習支援や進路相談をしています。

通室を希望する子どもは、自分に自信が持てず、交友関係で悩んだことのある子どもが大半です。

そこで、今年度は、「少しの勇気」と「新たな発見」を合言葉にして、子どもたちを支援しています。

具体的には、職員は、子どもたちが安心して会話を楽しみ、学びの中で、新たな発見を見出すことを意識して接しています。その結果、以下のような変容がみられるようになりました。

①入室時に、進んで挨拶できるようになった。
②定期的に通室することで、外出不安が和らぎ、規則的な生活リズムを取り戻すことができた。
③新たな発見で、学習に対する考え方が変わり、少しずつ、自分に自信が持てるようになった。
④職員との会話が増え、自分の思いや願いを自分の言葉で伝えられるようになった。
⑤送迎してくださる家族への感謝の気持ちを、自分の言葉で伝えることができるようになった。

夜間「学習・進路相談室」は、家族以外の人と関われる大切な居場所であり、大きな役割を担っています。このことを常に意識し、通室生一人ひとりが「心のエネルギー」を蓄え、新たな自分探しの道を歩き出すことができるように支援していきます。

みんなで成長

江南区教育相談室　柳　　修二

写真のとおり当室は外観がしゃれた造りで温かみを感じさせる建物です。中に入っていただくとそこで活動している子どもたちと職員にさらに温かみを感じるはずです。

当室には、小体育館のようなプレールームや広い敷地に畑・花壇があり、子どもたちがのびのびと活動しやすい環境となっています。個々の教育相談では聴くことを大切にして寄り添い、共に考える姿勢を心がけています。子ども支援室（呼称「そよ風ルーム」）では、小集団活動や個別学習を通して他者との関わりや学習への自信を回復し、自己理解と自己肯定感が高まるように支援しています。

子ども同士や職員と子どもたちの関わり、様々な活動・学習等の実体験を通し、刺激を受けながら各人が各々のペースで成長していけるとよいと考えています。

一人で悩まず籠らず、気軽に相談室を利用してみてください。一歩踏み出すことで世界は変わっていきます。ご利用をお待ちしています。